

「障害者」この時代に合った言葉か

朝日新聞 3月27日朝刊によると、兵庫県宝塚市議会は26日、市の条例で使われている「障害」の表記を「障碍(がい)」に改める条例案を可決した。4月1日に施行される。「害」の文字に不快感を抱く人がいるとして市が提案していた。固有名詞などを除き、市の公文書やホームページでは「障害」や「障がい」が全て「障碍」に変えられる。市内2カ所ある身体障害者支援センターの表記も変更される。

この記事を読んで、同紙22日朝刊「文化・文芸」欄の写真の記事を思い出したので、抜粋して紹介したい。

額縁からすり抜けた「障害者」と書かれた紙の下半分が、シュレッターで裁断されている。謎の路上芸術家バンクシーを想起させる立体作品が先月、東京・霞が関に掲示された。「普段使ってきた言葉への違和感」を問いかける作品に、ツイッター上でさまざまな反響があった。

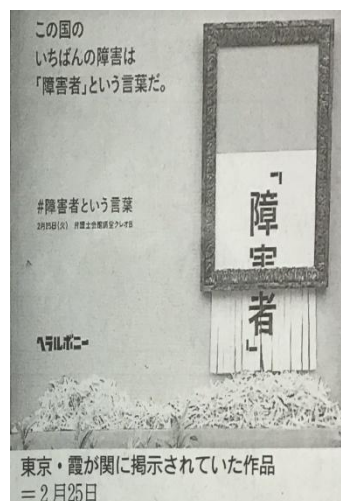
設置したのは、知的障害のある人が描いたアートをネクタイやハンカチなどにして販売するベンチャー企業。岩手県花巻市にある。社長の松田崇弥さん(28)は、安倍晋三首相の国会答弁をきっかけとした意見広告だったと明かした。

掲示する2カ月ほど前、「桜を見る会」の招待者名簿廃棄の経緯について、首相はこう述べた。「シュレッターの空き状況や、担当である障害者雇用の短時間勤務職員の勤務時間などとの調整を行った結果」。障害者が作業したため廃棄に時間がかかったと言わんばかりでは—。松田さんは「日本の『障害』に対する姿勢を象徴していて悲しいね」とツイートした。

「障害者だということが国民に向けた言い訳として成立すると判断されたのだとしたら、障害には『欠落』というイメージがあるのではないか。それを障害イコール『違い』にシフトしたいと思った」と振り返る。

双子の兄の副社長とともに、「障害者」という言葉そのものについて問題提起することにした。広告業界の友人たちが趣旨をふまえ、作品にしてくれた。松田さんの4歳上の兄は自閉症で知的障害がある。同じように楽しそうに生きているのに「障害者でかわいそう」と決めつけるような言い方をされることがあり、違和感を抱いてきた。

かつて「白痴」と言われていた言葉が、様々な議論を経て「精神薄弱」、さらに「知的障害」と表現されるようになった。裁断されかかった「障害者」に「この言葉も、いま、この時代に合っているのだろうか」という気持ちを込めた。



(2020年4月7日)